

青山学院女短大	磯谷	藤枝
東京家政学院大	原田	隆子
青山学院女短大	○前島	幸子
十文字学園女短大	古松	弥生

1. 本研究は、被服構成学の立場から、成長期男女の体型を把握することを目的とし、幼稚園年少児から高校3年生までの性差、年齢差を示数値によって観察したものである。

2. 対象は、1966年から1967年にわたり計測した。東京都内の私立の幼稚園、小学校、中学校、高等学校に在籍する男女合計1476名で、研究項目は、胸囲/身長・下肢長/身長・袖丈/身長・背肩幅/胸囲・頸付根囲/胸囲・胴囲/胸囲・腰囲/胸囲の7項目である。

3. 主な成果は、次のようである。

身長に対する胸囲の比率、すなわち比胸囲は、男女共幼児では約51で加齢と共に僅かずつ減少するが、中学1・2年生頃から増加し、高校3年生で再び約51となる。

学年が進むと共に増大する傾向のみられる項目は、下肢長/身長・袖丈/身長・腰囲/胸囲の3項目である。下肢長/身長は幼児で約50、中学1・2年生で最大値(約53)となり、以後僅かながら減少する。袖丈/身長は幼児で約31、中学2・3年生で約32となる。腰囲/胸囲は、

性差が著しく、全学年にわたり女子が優位である。

学年が進むと共に減少する傾向のみられる項目は、頸付根囲／胸囲・胴囲／胸囲で、特に後者では、小学6年生以後の女子にこの傾向が顕著であり、次第に胴のくびれた成人女子の体型に移行する様子がしられる。